三九四一番

うぐひすの　鳴くくら谷に　うちはめて　焼けは
死ぬとも　君をし待たむ

三九四二番

松の花　花数にしも　我が背子が　思へらなくに
もとな咲きつつ

八月七日の夜に、守大伴宿禰家持の館に集
ひて宴する歌

三九四三番

秋の田の　穂向き見がてり　我が背子が　ふさ手
折り来る　をみなへしかも